山東町埋蔵文化財調査報告書Ⅸ

町内遺跡

大原氏館跡・すも塚古墳

（第２次）

1993.3

滋賀県坂田郡

山東町教育委員会

すも塚古墳出土の鐔

すも塚古墳出土土器

町内遺跡

大原氏館跡・すも塚古墳

（第2次）

序

この報告書は、昨年度発行の「山東町埋蔵文化財調査報告書Ⅷ」と、極めて関わりの深いものです。あわせて御覧くださると、より参考にしていただけるのではないでしょうか。

「大原郷四か字共有文書」の中に、鎌倉時代の初期「佐々木信綱の嫡男重綱が、坂田郡に８千貫の所領をたまわり大原庄に居館を建てた云々」の記録があります。また、古くから土地の人々は“ここが大原判官の屋敷跡”と言い伝えて、開発の手の及ぶのを拒み続けてきました。

うっ蒼と茂る樹・竹林の西と南の二方には、堀を挟んで、南北に約80ｍ、東西に約70ｍの二重の土塁。その内側には、かなり大きな建物があったと思われる平坦なところが残っており、さらに、付近の小字名や昨年の調査結果からうかがえる時代相等からも「ここが大原判官屋敷跡」の可能性は大きいと言えます。しかし、そうと断定できる資料は何一つ得られていません。

今回は昨年度の補足調査として、周辺の地形測量を行いました。

時を同じくして、「すも塚の出土品」の調査をする機会に恵まれました。この出土品（刀剣・鐔・金環等）は、今から80年も前に発見され、区（烏脇）の共有物として大切に保管されていました。ところが年の経つに従い腐食がすすむので、滋賀県埋蔵文化財センターにお願いして保存処理をしていただくことになりました。このことがきっかけで、鐔に“銀象嵌”のあることの発見となりました。この鐔は完全なものではありませんが、６世紀の後半から７世紀前半のものとされる「すも塚古墳」から出土したものです。当時の坂田郡は、息長氏や坂田氏の在地豪族の支配下にあったと伝えられます。金・銀の象嵌は権力の象徴とされていましたから、すも塚の被葬者は、これら豪族とかかわりのある方などと考えると、古代のふるさとに抱くロマンが、さらに広がります。

いずれに致しましても、この調査報告書が、人々の埋蔵文化財に対する関心を深め、文化財愛護の心を強めてくれることを、また、後学の資として大いに役立ってくれることを願います。

おわりになりましたが、本調査の実施や報告のまとめには、たくさんの方々のお世話になりました。心から御礼申し上げて序にかえます。

平成５年３月

教育長　西秋良策

例　　言

1．本書は、文化庁・滋賀県の補助を受け、平成４年度国庫補助事業（総額1,000,000円）として実施した町内遺跡の調査概要をまとめたものである。

2．調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課の指導を受けて、山東町教育委員会が実施した。

3．事業期間は、平成４年７月１日からで、大原氏館跡地形測量については、平成４年12月１日より平成５年１月31日まで実施した。以後、遺物等整理、報告書作成を行った。

4．調査体制は下記のとおりである。

調査主体	山東町教育委員会	教育長	西秋良策
調査事務局	山東町教育委員会		
	社会教育課	課長	岡田　勉
	〃	係長	丸本光雄
	〃	主任	吉田裕明
	〃	主事	岩島昭彦
	〃	〃	松田　輝
調査担当	〃	〃	桂田峰男
調査補助員	谷口千夏		

5．今回の調査について、下記の方々に指導・助言・協力いただいた。記して感謝を表したい。

葛野泰樹、谷口徹、山岸岳、中井均、宮崎幹也、髙橋順之、長瀬治義（岐阜県可児市教育委員会）、中川菊治（烏脇区長）、馬渕尚之（本市場区長）、勝居源四郎、金城測量設計株式会社（測量委託）　　（順不同・敬称略）

6．X線透過写真については、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室、㈶滋賀県文化財保護協会　中川正人氏、今江正子氏を煩わした。記して感謝を表したい。

7．本書の執筆・編集は、桂田がおこなった。

目　　次

口絵

序

例言

Ⅰ．坂田郡山東町すも塚古墳

1．調査の経過 …… 1

2．出土遺物 …… 4

出土土器観察表 …… 12

3．おわりに …… 17

付章　すも塚古墳出土の銀象嵌について …… 20

Ⅱ．坂田郡山東町大原氏館跡

調査経緯 …… 26

挿図目次

図1．調査地周辺図

Ⅰ．すも塚古墳

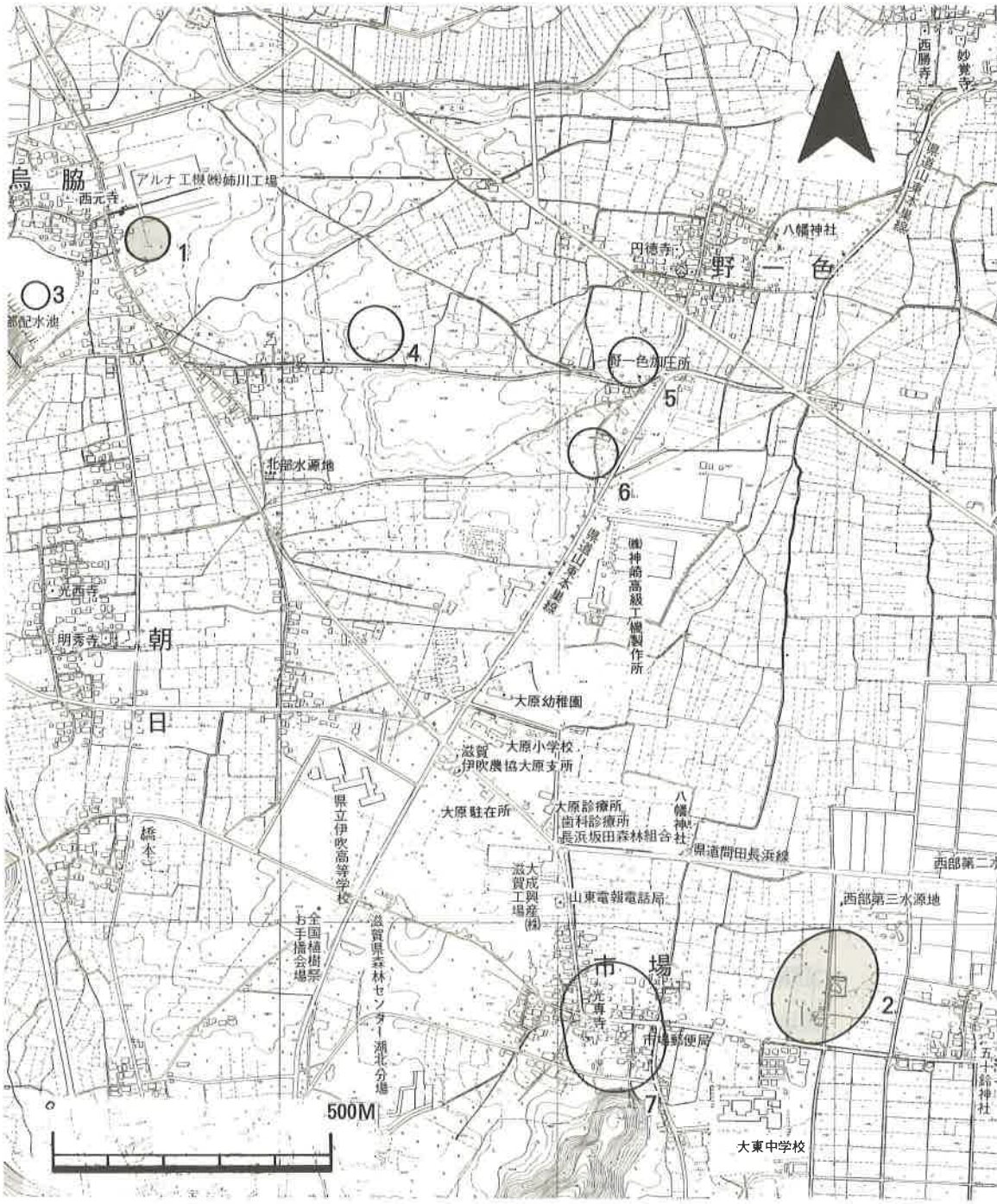
図2．すも塚古墳現状 …… 3
図3．出土遺物実測図 …… 9
図4．　〃 …… 10
図5．　〃 …… 11
図6．大原村野一色絵図（部分）…… 19
図7．鐔銀象嵌X線写真及び実測図 …… 22

Ⅱ．大原氏館跡

図8．地形測量図 …… 27

図版目次

図版一．すも塚古墳出土遺物　須恵器　1～11
図版二．　〃　須恵器　12～21
図版三．　〃　須恵器　22～27
図版四．　〃　須恵器　土師器　28～30
図版五．　〃　馬具 武具 装身具　31～37



1．すも塚古塚　2．大原氏館跡　3．猿田彦女命古墳
4．ぬか塚古墳　5．今中遺跡　6．正林坊遺跡
7．寺屋敷遺跡

図1　調査地周辺図

Ⅰ．坂田郡山東町　すも塚古墳

1．調 査 の 経 過

すも塚古墳は、町内に数多く周知されている古墳の中でも、時代等が確認されている古墳の一つである。

近年、徐々にではあるがこの古墳を取り巻く環境が変化してきたことから、昨年、遺跡の範囲確認とその内容を把握することを目的に現地調査を実施した。しかしながら、すも塚古墳に直接関連する遺構・遺物は確認し得なかった。

本年度は、明治45年に出土し現存する出土遺物について、復元、保存処理を実施し、一括的に資料化することを第一義として、管理者である烏脇区（区長　中川菊治氏）の御理解と御協力を得て事業を実施した。

出土遺物の概要等については、1978年（昭和53）に田中勝弘氏が『滋賀県文化財だより』No. 10（㈶滋賀県文化財保護協会）に紹介されているが、明治45年に烏脇の西元寺本堂改築の為の土取作業中に発見されて以来、80余年の歳月が経過しており、特に金属製品の錆化が進行していたので、滋賀県埋蔵文化財センターに保存処理を依頼し、また土器類についても復元等を行い、一括して記録に残すことを目的として、本書にまとめた。

位置と環境

山東町は、琵琶湖東北部に位置し、近江の最高峰　伊吹山の山裾に広がりを有する。北は、姉川・古代幹道の一つ北国脇往還道を隔てて伊吹・浅井両町と接し、西は横山丘陵を境として、長浜市・近江町に接している。また、南は霊仙・鈴鹿山脈により米原・関ケ原両町と境をなしており、四方を山々に囲まれた盆地（関ケ原地狭部）を呈している。

今回調査対象となったすも塚古墳周辺の地形は、北端に姉川が西流し、南に天野川が狭谷部を通って西流している。その間を南北に連なる横山丘陵が西端に位置し、それに並走するかのように黒田川が南流して、天野川と合流する。この黒田川のラインに沿って現集落が形成されると共に、現在多くの遺跡が周知されている。

つぎに歴史的環境であるが、すも塚古墳周辺において、現在のところ縄文・弥生時

代を示す遺跡は周知されてない。ただ、縄文時代遺跡として町南部には著名な番の面遺跡①が所在する。昭和30年に発掘調査が実施され、近畿地方で初めて縄文時代中期末の住居跡が検出された。立地や石鏃の多さから狩猟に生活の比重がかかっていたとされている。

古墳時代では、特に横山丘陵を中心に多くの古墳が分布している。山東町側には、烏脇A古墳（上塚）や平野部に唐古塚等、前方後円墳かとされる古墳が分布しているが、墳形などが明確ではなく前期に遡るものは知られていない。

中期には、その可能性のあるものとして、猿田彦女命古墳や（伝）息長広姫古墳群がある。猿田彦女命古墳は、横山丘陵より派生する舌状丘陵に立地していたが、土取工事により消滅している。当時の見聞等では、石材や遺物は出土しておらず、墳丘は版築上に土砂を盛り上げていたということで、おそらく横穴式石室以前の木棺直葬墳であったものと推察されている。（伝）息長広姫古墳群②は大字村居田に所在し、30代敏達天皇の皇后息長広姫陵墓として伝えられている。この地に息長陵が比定された発端は、元禄９年に同字光運寺本堂改築の際、この地を採掘したところ石槨と石棺が発見されたことによる。その後、明治５年、教務省の検察を経て、同28年息長陵として外観を整えられた。また、近年光運寺本堂裏の基壇石垣改築の折、円筒埴輪片が出土している。これら石槨や埴輪片の年代は、いずれも５世紀末であり、光運寺本堂付近に５世紀末頃の古墳が存在していたことは確実であり、６世紀後半に没した広姫の墓とするには年代的に相違すると指摘されている。

また、横山丘陵北端から西側平野部（現長浜市）にかけての姉川中流左岸には、茶臼山古墳、丸岡山古墳、垣篭古墳、越前塚古墳などの前方後円墳を含む長浜（坂田）古墳群が中期頃に成立する。

後期には、犬飼古墳、すも塚古墳、西山古墳、中の谷古墳、高岡塚古墳、塚本古墳、騨正塚古墳などが群として分布する。中でも、すも塚古墳、高岡塚古墳、騨正塚古墳は、６世紀後半に築造された横穴式石室を有する古墳として、その内容が知られている。高岡塚古墳③は、昭和59年に発掘調査が実施され、６世紀末から７世紀初頭頃の片袖式の横穴式石室が検出された。また、石室の形態・規模等から復元墳丘約18ｍの円墳であることが判明している。

すも塚古墳周辺をはじめ、町内に群としてとらえられる古墳は、古墳に対応する集落規模等の関係から、群を構成する基数が10基以下と比較的少ないことが特徴としてあげられる。

奈良・平安時代には、窯跡・集落跡・寺院跡等が知られている。窯跡としては、横山丘陵より派生する山丘麓に須恵器窯が分布しており、現段階では、西谷遺跡④（7世紀中葉）から菅江遺跡⑤（8世紀前葉〜中葉）への変遷が知られている。

集落跡では、上向川遺跡、北方田中遺跡等で発掘調査が実施されている。特に北方田中遺跡⑥では、多くの掘立柱建物跡、四脚門、井戸、呪符木簡などが確認され、郷長クラスの建物跡ではないかと推察されている。

寺院跡として明らかに確認できるものは知られていないが、大鹿遺跡では瓦が出土しており、また、昭和61年度に発掘調査が実施された法泉寺遺跡⑦では、寺院遺構は検出できなかったが、白鳳期に比定される瓦類が多数出土した。ただ、遺跡の立地や同じ天野川下流域の寺院遺構や出土瓦との検討から、瓦窯の可能性も予想されている。

図2　すも塚古墳現状

2．出　土　遺　物

出土遺物は、明治45年に土取作業中に出土したもので、石室等遺構の状態が不明なことから、どのような位置にあったものか知る由もない。

遺物の内容を概観すると、須恵器（杯身・杯蓋・高杯・提瓶・平瓶・短頸壺）、土師器（壺）、馬具（轡・鐙）、武具（鐔・鉄鏃）、装身具（金環・銀環・ガラス小玉）などが出土している。

（1）土器

出土土器は、須恵器29点、土師器１点の計30点を数える。その内訳は、須恵器杯身13、杯蓋８、高杯４、提瓶２、平瓶１、短頸壺１で、その内の約半数がほぼ完形をとどめている。

土師器は、小型丸底壺１点であるが、これもほぼ完形である。

尚、個々の土器の細部の観察については、「出土土器観察表」を参照されたい。また、ここで表記した遺物番号は、各挿図・図版における番号と一致する。

須恵器

杯身（１～13）は13点出土しており、形態より３類に大別できる。

〔身Ⅰ類〕（１）は、口径11.7㎝に対し、受部径が15.5㎝、たち上がり高1.4㎝、器高5.0㎝を測り、身Ⅱ類・身Ⅲ類に比べやや大型である。たち上がりは長く、内湾気味で、高さは1.4㎝と高い。端部は尖り気味に収まる。受部は外上方へ直線的に伸び、端部は尖り気味である。底部は深く、丸味がある。

調整は、底部外面回転ヘラ切り未調整で、ヘラ起こし痕かと思われるスジ状の圧痕が見られ、底部内面には指圧痕が残る。他は内外面共に回転ナデ調整である。胎土は密で精良。ロクロの回転は不明である。

〔身Ⅱ類〕（２～８）は、口径11.6～12.8㎝、受部径14.0～15.2㎝、たち上がり高0.8～1.1㎝、器高3.6～4.8㎝を測る一群である。たち上がりは1.0㎝を相前後するものがほとんどで、内傾しているが内傾度はそれほど大きくない。端部は尖り気味に収まる

ものがほとんどである。受部は水平に伸びるものが２点、外上方に伸びるものが５点確認でき、端部は丸く収まるものが多い。底部は比較的浅いが、丸みを帯びている。

調整は、底部外面約⅔は回転ヘラ削り調整で、他は内外面共に回転ナデ調整である。胎土は、身Ⅰ・Ⅲ類と異なり、砂粒及び小石粒を多く含み、灰褐色を呈する。ロクロの回転は全て右回りである。

〔身Ⅲ類〕（９～13）は、口径9.3～11.0㎝、受部径11.7～13.1㎝、たち上がり高0.6～0.7㎝、器高3.6～4.2㎝を測る一群で、身Ⅰ・Ⅱ類に比べやや小型である。たち上がりは短く、内傾し、受部の高さに近くなっている。端部は尖り気味に収まるものがほとんどである。受部は水平もしくは外上方に伸び、端部はほとんどが尖り気味に収められている。

調整は、底部外面回転ヘラ切り未調整で、ヘラ起こし痕かと思われるスジ状の圧痕が確認できる。底部内面には指圧痕を残すものもある。他は内外面共に回転ナデ調整である。胎土は密で精良である。ロクロの回転については、右回り３点、不明が２点となっている。

杯蓋（14～21）は８点出土しており、形態により３類に大別できる。

〔蓋Ⅰ類〕（14）は、口径13.8㎝、器高5.1㎝を測る。口縁部はわずかに内傾しながら垂直に下がる。端部は内傾する平面をなす。天井部は深く、丸みを帯びている。

調整は、天井部外面では回転ヘラ切り未調整で、他は内外面共に回転ナデ調整。胎土は密で精良。胎土もしくは焼成が異なるためか、蓋Ⅱ類に比べかなりの重量感がある。色調は暗灰色を呈す。ロクロの回転は、左回りである。

〔蓋Ⅱ類〕（15～20）は、口径13.3～14.0㎝、器高4.0～4.4㎝の一群でる。口縁部はほぼ垂直に下がり、端部は丸い。口縁部内面に沈線をもつものもある。天井部はやや低いが、丸みを帯びている。

調整は、天井部外面約⅔は回転ヘラ削り調整で、他は内外面共に回転ナデ調整である。胎土は蓋Ⅰ類と異なり砂粒及び小石粒を多く含み、色調も灰褐色を呈す。ロクロの回転は、19のみ左回りで、他の５点は右回りとなっている。

〔蓋Ⅲ類〕（21）は、口径14.0㎝に対し、器高3.3㎝を測る平らで浅い蓋である。口

縁部はやや下外方に下がり、端部は鋭く収められている。天井部は低く、平坦である。

調整及び胎土は蓋Ⅱ類と同様である。ロクロの回転は、右回りとなっている。

有蓋高杯（22〜25）は全て短脚である。口径11.5〜12.3㎝、受部径14.2〜15.2㎝、たち上がり高1.1〜1.2㎝、脚部高4.6〜5.0㎝を測る。杯部のたち上がりは、1.1㎝程度で、内傾しているが、その内傾度はさほど大きくない。端部は丸みを帯びているものとわずかに面をなすものがある。受部は上外方に伸び、端部はやや丸く収まる。脚部は短脚で下外方に外反して開き、端部は内傾する凹面をなし、内側で接地する。（25）は、脚部上端の三方向に、径1.5㎝の円孔透しを穿つ。

調整は自然釉付着のため不明のものもあるが、杯部外面約⅓は回転ヘラ削り調整を施す。他は内外面共に回転ナデ調整である。胎土は砂粒及び小石粒を多く含む。（中には径1.0㎝程の石粒を含むものもある。）

提瓶（26・27）は２点で、（26）は口径5.6㎝、器高17.9㎝を測り、（27）はやや小型で口径6.8㎝、器高13.8㎝を測る。口縁部は上外方へ伸び、端部は（26）が内傾する凹面をなし、（27）は内傾する平面をなす。体部は前面が丸くふくれ、背面はほぼ平坦を呈する。肩部には左右にカギ状の把手を配する。

調整は、（26）が口縁部外面に細いスジ状の回転ナデ調整、体部背面の外側約¾に回転ヘラ削り調整を施している。これに対して（27）は、口縁部から肩部にかけては一定方向のナデ調整、体部前面は不定方向のナデ調整、背面には不定方向のヘラ削りが施されているなど、調整にロクロの回転を利用しない粗雑な仕上げとなっている。胎土は砂粒及び小石粒を多く含んでいる。ロクロの回転は、（26）は右回りである。

平瓶（28）は、口径5.0㎝、器高10.7㎝、体部最大径12.0㎝を測る、やや小型の平瓶である。口縁部は斜上方へ伸び、端部は丸く収まる。体部上面はやや扁平だが、肩の張りは弱い。上面口縁部寄りに径1.1㎝の円形の粘土粒を１個貼付している。全体的に丸みを呈しており、底部から⅔前後の位置に体部最大径を測る。底部は平坦である。

調整は、底部外面約⅔は回転ヘラ削り調整、体部外面は丁寧な回転ナデ調整が施さ

れている。体部上面は平行叩きで、一部、口縁部を取り付けた際のスリ消しではないかと思われる痕が確認できる。他は内外面共に回転ナデ調整が施されている。胎土は密で精良である。ロクロの回転は、左回転である。

短頸壺（29）は、口径7.5㎝、器高11.3㎝、体部最大径12.2㎝を測る、やや小型の短頸壺で、形態から蓋を有していたものと思われる。口縁部は、直立気味に短く外方へ開くが、その中程でわずかに内方へ曲がる。肩部はやや張り気味で、肩部との境で体部最大径をはかった後、下内方に下がる。底部は丸みを帯びている。また、口頸部に長径0.8㎝短径0.5㎝の孔が穿っている。孔は内側から穿っているようであるが、意図的なものか破損したものかは不明である。

調整は、底部外面に回転ヘラ削り調整が施されており、他は内外面共に回転ナデ調整である。ロクロの回転は、左回りである。

土師器

小型丸底壺（30）は口径10.4㎝、器高15.0㎝、体部最大径12.7㎝を測る。口縁部は、外上方へやや外反気味に伸びている。体部はほぼ球状を呈し、底部は丸い。

調整は、口縁部内面についてはヨコ方向のハケ目調整で、口縁部外面½より底体部にかけて、タテ方向（右下り）のハケ目調整が施されている。

（２）馬具

轡（くつわ）は、素環鏡板付轡の形態をとっており、引手（ひって）と銜（はみ）とを遊環（ゆうかん）を介在させて連結し、円形の鏡板に取り付けている。鏡板の一方に兵庫鎖（ひょうごくさり）の立聞（たちぎぎ）が付く。銜は、銜先と喞金（くぐみがね）の一部が残存するだけで、長さ等は定かでないが、おそらく金具２本によって構成される二連式であったと思われる。鏡板の径は8.5㎝、遊環の径は3.2㎝を測る。引手は先端部分が欠損しており、その形態は不明であるが、現存する長さは長い方で17.0㎝を測る。立聞の兵庫鎖の長さは3.6㎝である。

鐙（あぶみ）は、壺鐙の形態をとっており、鉸具（かこ）と三段の兵庫鎖とからなる鐙靼（みずお）と、木製の壺を留めたと思われるU字状金具が出土しており、ほぼ1対が確認できる。材質は鉄製である。それぞれの長さについては、鉸具10.0㎝、鎖1段平均7.5㎝、U字状金具13.2㎝を測り、鋲の数は左右3対が認められる。鉸具からU字状金具下端までは、復元すると約42㎝となる。

（3）武具

鐔（つば）は鉄製で約半分が欠損している。復元すると長径9.0㎝、短径7.5㎝となり、厚さ0.6㎝を測る。いわゆる倒卵形を呈しており、地の部分に長径1.0〜1.2㎝、短径0.7㎝〜1.0㎝の方形及び台形状の透し窓が9窓復元できる。また、この鐔にX線透過試験を実施したところ、外縁部（側面部）に2条の直線文と5個の「の」字状文（勾玉文）を配した銀象嵌が施されていることが判明した。

鉄鏃は、1点のみで、腸扶（わたく）りが確認でき、鋒部は横断面レンズ状を呈する。鋒に続いて横断面長方形の棒状部が付き、更に茎部には木質が現存しており、篦（の）に挿入されていたことがわかる。長さは11.9㎝（鋒部5.1㎝、棒状部3.0㎝、茎部3.8㎝）、幅2.5㎝を測る。

（4）装身具

装身具としては、金環、銀環、ガラス製小玉が各1点ずつ遺存している。

金環は、長径3.4㎝、短径3.2㎝を測り、太さ0.9㎝であるが、中は中空状で厚さ0.1㎝となる。**銀環**は、長径3.5㎝、短径3.2㎝、太さ0.9㎝を測る。**ガラス製小玉**は、径0.6㎝のほぼ円形を呈し、ライトブルーの色調をもつ。

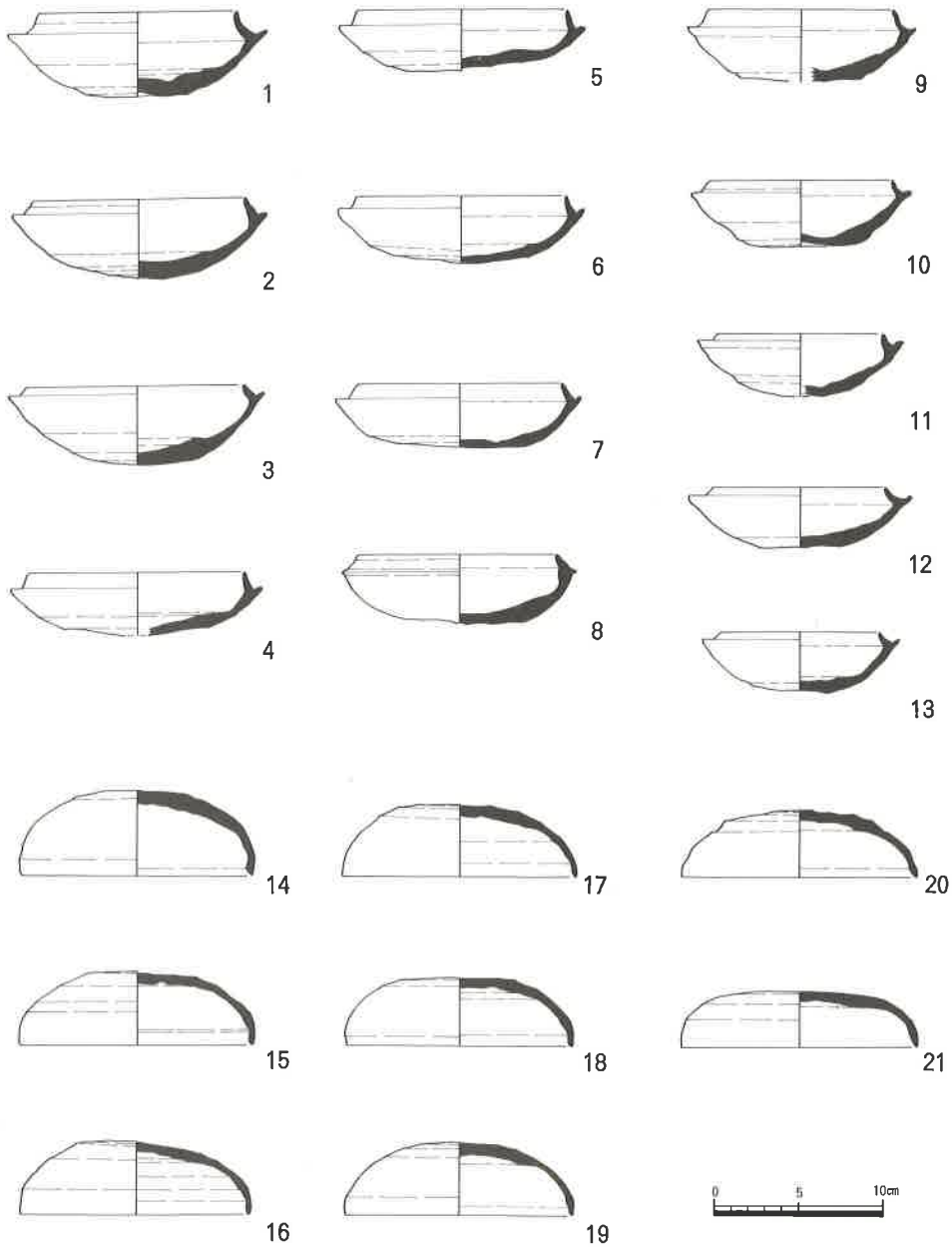


図３　出土遺物実測図

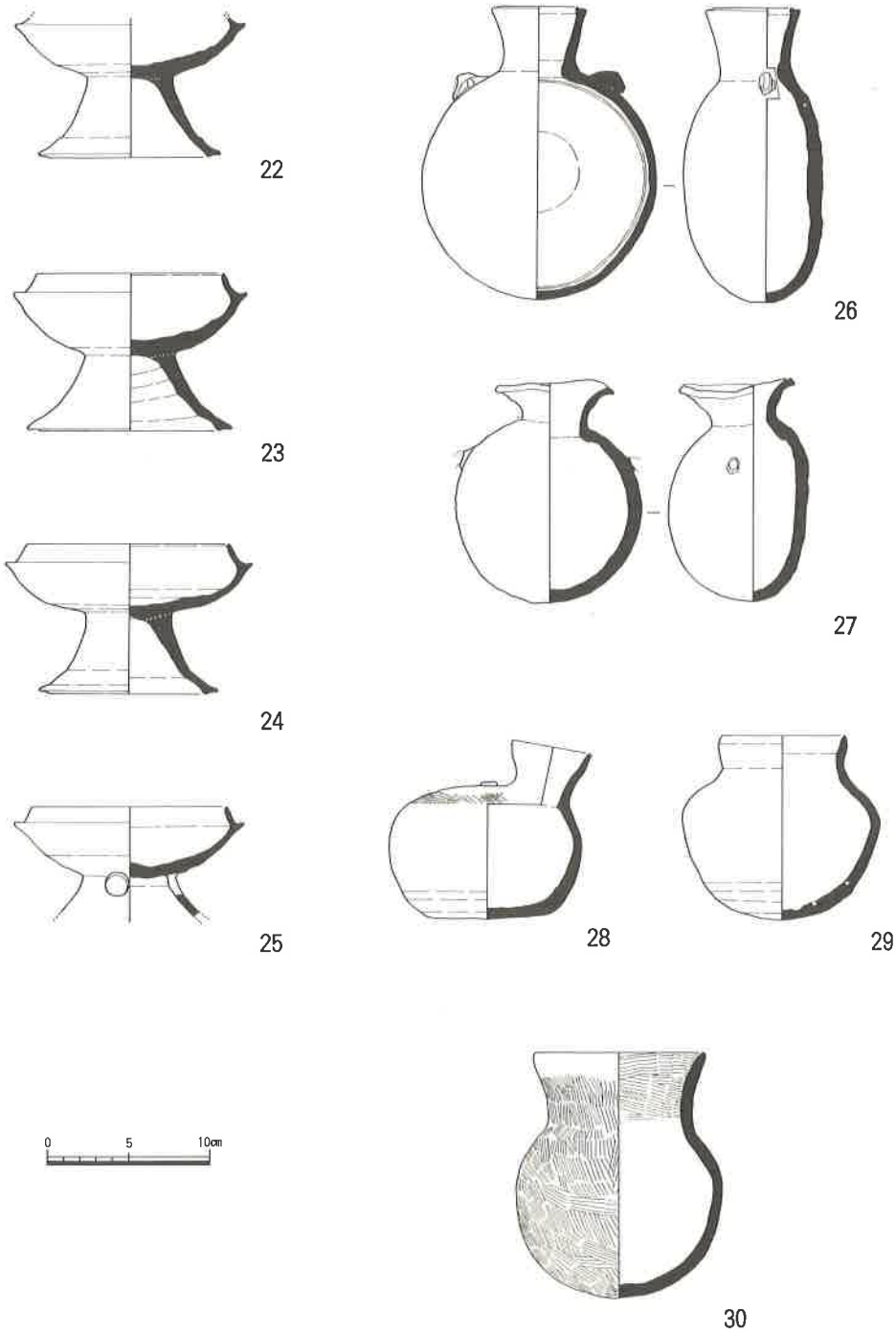


図4　出土遺物実測図

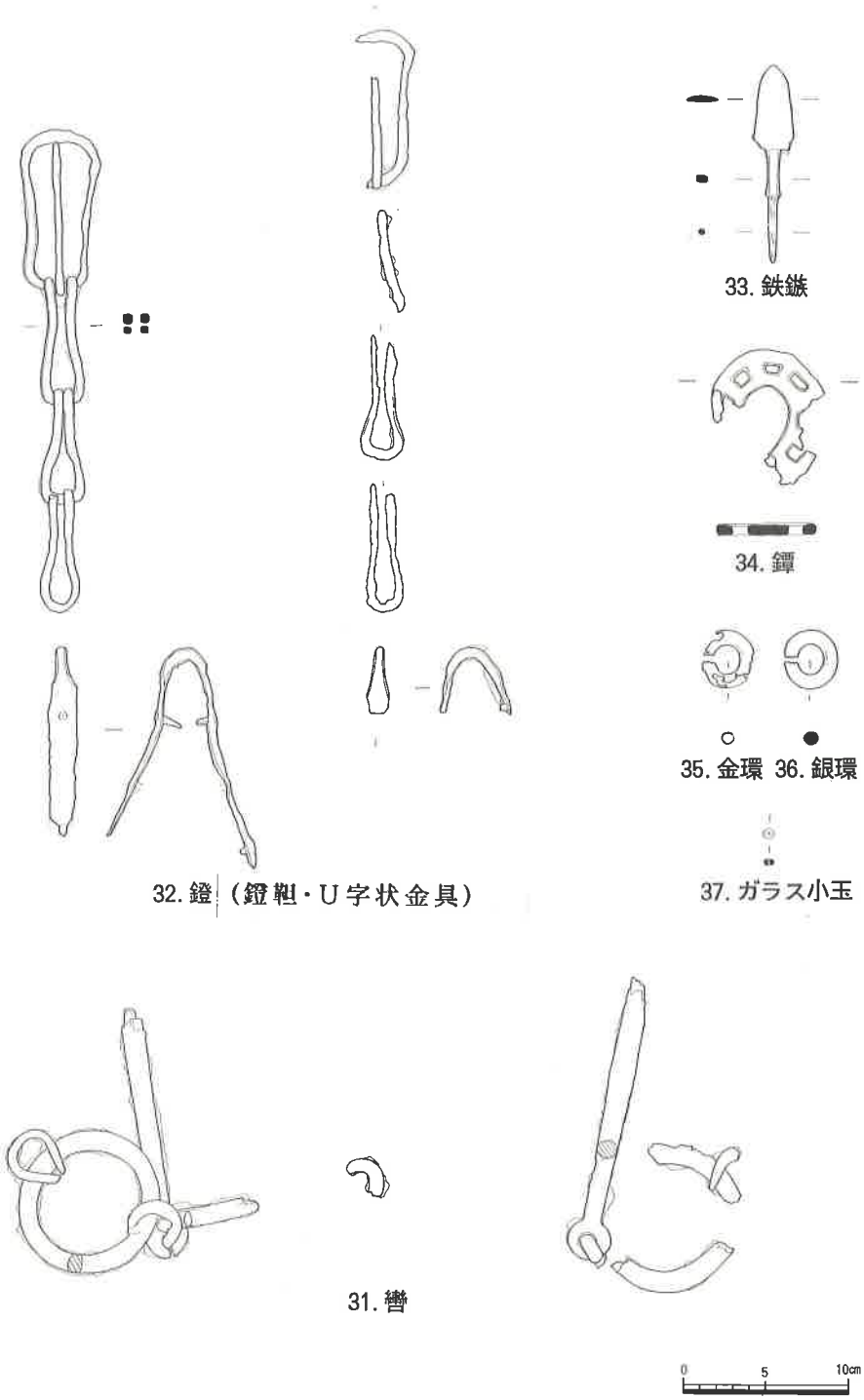


図5　出土遺物実測図

出土土器観察表

器　種	図面番号	法　量（㎝）	形　態　の　特　徴	成　形　の　特　徴	備　考
須恵器杯身Ⅰ	1	口径 11.7 受部径 15.5 器高 5.0 たちあがり高 1.4 底体部高 3.6	○たちあがりは長く、内傾し、端部は尖り気味。 ○受部は外上方へ直線的に伸び、端部は尖り気味。 ○底部に丸味があり、比較的深い。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整で、ヘラおこしの痕かと思われるスジ状の圧痕あり。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：灰褐色 胎土：密 焼成：良好、堅緻 2/3残
杯身Ⅱ	2	口径 12.5 受部径 15.1 器高 4.8 たちあがり高 1.0 底体部高 3.8	○たちあがりは内傾し、端部は尖り気味。 ○受部はやや水平に伸び、端部は尖り気味。 ○底部に丸味があり、比較的深い。	○底体部外面約2/3は回転ヘラ削り調整。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：外、灰褐色、内、黒灰色 胎土：良好、砂粒及び小石粒含む 焼成：良好、堅緻 完形 ロクロの回転：右
	3	口径 12.7 受部径 15.2 器高 4.7 たちあがり高 0.8 底体部高 3.9	○たちあがりは短く、内傾し、端部は尖り気味。 ○受部は外上方へ伸び、端部はうすく尖り気味。 ○底部に丸味があり、比較的深い。 ○底体部外面全体に自然釉及び窯壁塊付着。	○底体部外面約2/3は回転ヘラ削り調整。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：外、淡灰褐色、内、灰褐色 胎土：良好、砂粒及び小石粒含む 焼成：良好、堅緻 完形 ロクロの回転：右
	4	口径 12.8 受部径 15.0 器高 (4.0) たちあがり高 1.0 底体部高 (3.0)	○たちあがりは内傾し、端部は内傾してわずかな面をなす。 ○受部は外上方へ伸び、端部は丸味をおびている。 ○底体部は浅く、斜上方に立ち上がる。	○底体部外面約2/3は回転ヘラ削り調整。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：灰褐色 胎土：良好、砂粒及び小石粒含む 焼成：良好、堅緻 1/4残 ロクロの回転：右
	5	口径 12.3 受部径 14.5 器高 3.6 たちあがり高 1.1 底体部高 2.5	○たちあがりは内傾し、端部は尖り気味。 ○受部はやや水平に近く、端部は丸味をおびている。 ○底体部は浅く、弯曲するように立ち上がる。	○底体部外面約2/3は回転ヘラ削り調整。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：灰褐色 胎土：良好、砂粒及び小石粒含む 焼成：良好、堅緻 完形 ロクロの回転：右
	6	口径 12.2 受部径 14.5 器高 3.9 たちあがり高 1.0 底体部高 2.9	○たちあがりは内傾し、端部は尖り気味。 ○受部は外上方へ伸び、端部は丸味をおびている。 ○底体部は浅く、弯曲するように立ち上がる。	○底体部外面約2/3は回転ヘラ削り調整。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：灰褐色 胎土：良好、砂粒及び小石粒含む 焼成：良好、堅緻 完形 ロクロの回転：右

※法量の覧の（　）の数値は復元値

器　　種	図面番号	法　　量（cm）	形　態　の　特　徴	成　形　の　特　徴	備　　考
須恵器杯身Ⅱ	7	口径 12.0 受部径 14.5 器高 3.8 たちあがり高 1.0 底体部高 2.8	○たちあがりは内傾し、端部は尖り気味。 ○受部は外上方へ伸び、端部は丸味をおびている。 ○底体部は浅く、弯曲するように立ち上がる。	○底体部外面約2/3は回転ヘラ削り調整。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：灰褐色 胎土：良好、砂粒及び小石粒含む 焼成：良好、堅緻 2/3残 ロクロの回転：右
	8	口径 11.6 受部径 14.0 器高 4.1 たちあがり高 0.8 底体部高 3.3	○たちあがりは短く、内傾し、端部は丸く仕上げる。 ○受部は水平に伸び、端部は尖り気味。 ○底部は平らに近く、底体部は弯曲するように立ち上がる。	○底体部外面は回転ヘラ削り調整か？ （生焼けのため不鮮明） ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：外、淡灰色、内、黄白色 胎土：良好、砂粒及び小石粒含む 焼成：不良（生焼け） 完形 ロクロの回転：右
杯身Ⅲ	9	口径 11.0 受部径 13.5 器高 (4.2) たちあがり高 1.1 底体部高 (3.1)	○たちあがりは内傾し、端部は丸味をおびている。 ○受部は外上方へ伸び、端部はうすく尖り気味。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整で、ヘラおこしの痕かと思われるスジ状の圧痕あり。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：外、灰褐色、内、黄灰色 胎土：密 焼成：良好、堅緻 1/3残
	10	口径 10.0 受部径 13.1 器高 3.9 たちあがり高 0.7 底体部高 3.2	○たちあがりは短く、内弯し、端部は尖り気味。 ○受部はやや水平に近く、端部は尖り気味。 ○底体部は斜上方に立ち上がる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整で、ヘラおこしの痕かと思われるスジ状の圧痕あり。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：外、黒灰色、内、青灰色 胎土：密 焼成：良好、堅緻 完形 ロクロの回転：右
	11	口径 9.7 受部径 12.2 器高 (3.7) たちあがり高 0.7 底体部高 3.0	○たちあがりは短く、内傾し、端部は尖り気味。 ○受部はやや水平に近く、端部は鋭い。 ○底体部は斜上方に立ち上がる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整で、ヘラおこしの痕かと思われるスジ状の圧痕あり。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：外、淡灰褐色、内、灰黄色 胎土：良好、わずかに砂粒含む 焼成：不良（生焼け） 1/3残
	12	口径 10.2 受部径 13.2 器高 3.8 たちあがり高 0.6 底体部高 3.2	○たちあがりは短く、内傾し、端部は尖り気味。 ○受部は外上方へ伸び、端部は丸味をおびている。 ○底体部は浅く、斜上方にゆるやかに立ち上がる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整で、ヘラおこしの痕かと思われるスジ状の圧痕あり。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：外、淡褐色、内、淡灰褐色 胎土：密 焼成：良好、堅緻 完形 ロクロの回転：右

器種	図面番号	法量（cm）	形態の特徴	成形の特徴	備考
須恵器杯身Ⅲ	13	口径 9.3 受部径 11.7 器高 3.6 たちあがり高 0.6 底体部高 3.0	○たちあがりは短く、内傾し、端部は尖り気味。 ○受部は外上方へ伸び、端部は尖り気味。 ○底体部は斜上方にゆるやかに立ち上がる。	○底部外面は回転ヘラ切り未調整で、ヘラおこしの痕かと思われるスジ状の圧痕あり。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。 ○底部内面中央に指押えの痕あり。	色調：灰黄色 胎土：密 焼成：良好 完形 ロクロの回転：右
須恵器杯蓋Ⅰ	14	口径 13.8 器高 5.1	○口縁部はわずかに内傾しながら垂直に下がる。端部は内傾する平面に仕上げている。 ○天井部は深く、丸味をおびている。	○天井部外面は回転ヘラ切り未調整。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：暗灰色 胎土：密 焼成：良好、堅緻 完形・ロクロの回転：左
杯蓋Ⅱ	15	口径 13.7 器高 4.3	○口縁部はほぼ垂直に下がり、端部はやや丸い。 ○天井部はやや低く、丸味をおびている。	○天井部外面約2/3は回転ヘラ削り調整。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：灰褐色 胎土：良好、砂粒及び小石粒含む 焼成：良好、堅緻 完形・ロクロの回転：右
	16	口径 13.5 器高 4.4	○口縁部はほぼ垂直に下がり、端部は丸い。 ○天井部はやや低く、丸味をおびている。	○天井部外面約2/3は回転ヘラ削り調整。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：灰褐色 胎土：良好、砂粒及び小石粒含む 焼成：良好、堅緻 完形・ロクロの回転：右
	17	口径 13.8 器高 4.3	○口縁部はやや下外方に下がり、端部は丸い。 ○天井部はやや低く、丸味をおびている。	○天井部外面約2/3は回転ヘラ削り調整。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：灰褐色 胎土：良好、砂粒及び小石粒含む 焼成：良好、堅緻 ほぼ完形・ロクロの回転：右
	18	口径 13.3 器高 4.0	○口縁部はほぼ垂直に下がり、端部は丸い。 ○天井部はやや低く、丸味をおびている。 ○天井部外面に自然釉及び窯壁塊付着。	○天井部外面約2/3は回転ヘラ削り調整。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：灰褐色 胎土：良好、砂粒及び小石粒含む 焼成：良好、堅緻 完形・ロクロの回転：右
	19	口径 13.5 器高 4.3	○口縁部はほぼ垂直に下がり、端部は丸い。 ○天井部はやや低く、丸味をおびている。 ○天井部外面に窯壁塊付着。	○天井部外面約2/3は回転ヘラ削り調整。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：淡褐色 胎土：良好、砂粒及び小石粒含む 焼成：良好、堅緻 2/3残・ロクロの回転：左

器　　種	図面番号	法　量（cm）	形　態　の　特　徴	成　形　の　特　徴	備　　考
須恵器杯蓋Ⅱ	20	口径　14.0 器高　4.0	○口縁部はやや下外方に下がり、端部は丸い。 ○天井部はやや低く、丸味をおびている。	○天井部外面約1/2は回転ヘラ削り調整。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：外、灰褐色、内、淡褐色 胎土：良好、砂粒及び小石粒含む 焼成：良好、堅緻 4/5残・ロクロの回転：右
杯蓋Ⅲ	21	口径　14.0 器高　3.3	○口縁部は下外方に下がり、端部は尖り気味。 ○天井部は低く、平ら。	○天井部外面約2/3は回転ヘラ削り調整。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：灰褐色 胎土：良好、砂粒及び小石粒含む 焼成：良好、堅緻 5/6残・ロクロの回転：右
須恵器有蓋高杯	22	口径　12.3 受部径　14.2 基部径　5.3 脚部高　5.0 脚底径　11.2	○たちあがりは端部欠損のため不明。 ○受部は上外方に伸び、端部はやや丸い。 ○杯底部は浅く、平らに近い。 ○脚部は下外方に外反して開き、端部は内傾する凹面を成し、内側で接地する。 ○杯部、脚部外面、部分的に自然釉付着。	○杯部外面約1/3は回転ヘラ削り調整。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：灰褐色 胎土：良好、砂粒及び10㎜程の小石粒も含む 焼成：良好、堅緻 2/3残
	23	口径　11.5 受部径　14.4 たちあがり高　1.1 基部径　5.6 脚部高　4.6 脚底径　12.6	○たちあがりは内弯気味でやや高く、端部は内傾してわずかに面を成す。 ○受部は上外方に伸び、端部はやや丸い。 ○杯底部は丸味をおびている。 ○脚部は下外方に外反して開き、端部は内傾する凹面を成し、内側で接地する。 ○杯部、脚部外面、部分的に自然釉付着。	○杯部外面約1/3は回転ヘラ削り調整。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：灰褐色 胎土：良好、砂粒及び小石粒含む 焼成：良好、堅緻 2/3残 ロクロの回転：右
	24	口径　12.3 受部径　15.2 たちあがり高　1.2 基部径　5.3 脚部高　5.0 脚底径　11.0	○たちあがりは内弯気味でやや高く、端部は内傾してわずかに面を成す。 ○受部は上外方に伸び、端部はやや丸い。 ○杯底部は丸味をおびている。 ○脚部は下外方に外反して開き、端部は内傾する凹面を成し、内側で接地する。 ○杯部、脚部外面、部分的に自然釉付着。	○杯部外面約1/3は回転ヘラ削り調整。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：灰褐色 胎土：良好、砂粒及び10㎜程の小石粒も含む 焼成：良好、堅緻 2/3残
	25	口径　12.0 受部径　14.2 たちあがり高　1.1 基部径　5.7	○たちあがりは内弯気味でやや高く、端部はやや丸い。 ○受部は上外方に伸び、端部はやや丸い。 ○杯底部は丸味をおびている。 ○脚部上端３方向に径1.5㎝の円孔スカシを有する。	○自然釉付着のため、外面の成形は不明。 ○内面は回転ナデ調整。	色調：灰褐色 胎土：良好、砂粒含む 焼成：良好、堅緻 1/4残

器　　種	図面番号	法　量（cm）	形　態　の　特　徴	成　形　の　特　徴	備　　考
須恵器提瓶	26	口径　5.6 器高　17.9 基部径　4.5	○口縁部は上外方へ伸び、端部は内傾する凹面を成す。 ○体部は前面が丸くふくれ、背面は平らに近い。 ○肩部にカギ状に下方へ屈曲した左右一対の把手を付す。	○口縁部外面は細いスジ状の回転ナデ調整。 ○体部背面の外面約3/4は回転ヘラ削り調整。 ○他は回転ナデ調整。	色調：前面、黒灰色、背面、黄灰色 胎土：良好、砂粒及び小石粒含む 焼成：良好、堅緻 完形・ロクロの回転：右
	27	口径　6.8 器高　13.8 基部径　4.0	○口縁部は上外方へ伸び、端部は内傾して面を成す。 ○体部は前面が丸くふくれ、背面は平らに近い。 ○肩部に破損しているが、カギ状と思われる左右一対の把手を付す。	○口縁部から肩部にかけ一定方向のナデ調整。 ○体部前面は不定方向のナデ調整。 ○体部背面は不定方向のヘラ削り調整。	色調：淡黒灰色 胎土：良好、砂粒及び小石粒含む 焼成：良好 ほぼ完形
須恵器平瓶	28	口径　5.0 器高　10.7 基部径　3.6 体部最大径　12.0	○口縁部は斜上方へ伸び、端部は丸味をおびている。 ○体部は全体に丸味をもち、多前後の位置に体部最大径を測る。底部は平ら。 ○体部上面に径1.1cmの円形の粘土粒を1個貼付。	○底部外面約2/3は回転ヘラ削り調整。 ○体部上面は平行タタキ。一部スリ消しがみられる。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。	色調：灰褐色 胎土：密 焼成：良好 完形・ロクロの回転：左
須恵器短頸壺	29	口径　7.5 器高　11.3 体部最大径　12.0	○口縁部は直立気味に外方に開くが、その中程でわずかに内方へまがる。 ○肩部は下外方に下がったのち、下内方に下がる。 ○底部は丸味をおびている。	○底部外面は回転ヘラ削り調整。 ○他は内外面ともに回転ナデ調整。 ○口頸部に内部からあけたと思われる孔1個あり。	色調：淡灰褐色 胎土：良好、砂粒及び小石粒含む 焼成：良好 完形・ロクロの回転：左
土師器 小型丸底壺	30	口径　10.4 器高　15.0 体部最大径　12.7	○口縁部は外上方へやや外反気味に伸びる。 ○底部は丸く、体部はほぼ球状を呈す。	○口縁部外面上方約1/2は横ナデ調整。 ○口縁部内面は横方向のハケ目調整。 ○口縁部外面上方約1/2より底体部にかけては縦方向のハケ目調整。	色調：淡赤褐色 胎土：やや不良 焼成：良好 完形

3．おわりに

今回のすも塚古墳の出土遺物について、形態を中心に分類・観察してきたのであるが、これに年代的要素などを若干加味して、当古墳を考えてみたい。

まず、杯身についてはその形態的特徴から時期をみると、杯身Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ類という流れが読みとれる。つまり、杯身Ⅰ類の口径は11.7㎝だが、受部径が15㎝以上を測る大型でたち上がりが高く、底部の深いものから、杯身Ⅲ類の口径９～11㎝、受部径13㎝までの小型でたち上がりが受部の高さに近く、底部が浅いものへと変遷する。これを「陶邑」[8] の須恵器編年に求めてみると、杯身Ⅰ類はⅡ－４期（ＴＫ230－Ⅱ）、Ⅱ類はⅡ－５期（ＭＴ５－Ⅲ・ＴＫ209）、Ⅲ類はⅡ－６期（ＴＫ79）頃に比定できる。

杯蓋についても、杯身同様、蓋Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ類という変遷が読みとれる。口縁部は垂直から下外方へ、口縁端部は内傾する平面から丸味を帯びたもの、更に鋭いものへ。天井部は深く丸いものから低く平坦な形態へと移行している。出土した８点中６点を占める蓋Ⅱ類の時期を「陶邑」に求めると、Ⅱ－５期頃に比定でき、ＭＴ５－Ⅲ・ＴＫ209に類例をみることができる。成形においても、蓋Ⅱ類は外面⅔程に回転ヘラ削り調整を施しており、ロクロの回転もその大半が順回りとなっているなど、Ⅱ－５期頃に相当すると考えられる。蓋Ⅰ・Ⅲ類についても、各１点ずつではあるが、Ⅰ類はⅡ－４期、Ⅲ類はⅡ－６期の形態に類例をみることができることから、Ⅱ－５期を中心としたⅡ期後半の年代を与えることができる。

平瓶については、体部が丸く、肩の張りが弱いという特徴から古墳時代後半頃で平瓶出現の初期のものと思われる。

轡は、鉄製環状の鏡板のつく簡素なもので、この形式のものは、６世紀第１四半世紀から第３四半世紀まで存在したといわれている[9]。

鐙は、Ｕ字状金具を伴うことから木製の壺鐙を留めていたと思われる。木製壺鐙は、６世紀第１四半世紀から７世紀第３四半世紀頃まで存在しており、当鐙はＵ字状金具の鋲数や鉸具の形状から、６世紀後半から７世紀前半に該当するものと思われる[10]。

以上、出土遺物からその年代を追ってみると、およそ６世紀後半から７世紀初頭にかけての年代を与えることができる。また、その中でも須恵器類の形式から大きく三時期に渡る様相を示しており、当然複数の被葬者ということが考えられるが、基本的

に遺構との対比ができないことが前提にあり、Ⅰ類（Ⅱ－４期）からⅡ類（Ⅱ－５期）にかけては、出土点数も僅少なことから明確に時期差を断定しがたいが、Ⅱ類からⅢ類（Ⅱ－６期）については、形態・成形等に明確な時期差を見出せることから、少なくとも１回の追葬の可能性があるのではないかと考える。

つぎに、当古墳規模等であるが、これは前述したように明治45年の土取作業中に遺物が出土した経緯から、明確なことは不明と言わざるを得ない。ただ、明治９年に作成された地籍図である「坂田郡大原村大字野一色全図」（いわゆる明治の大絵図）に、当古墳を確認することができる。（図６参照）これを観ると、現烏脇区の広場あたりが凡例にはないが茶色で塗られており、小高い丘のように描かれている。この地番を拾うと大字野一色字西浦606番地となり（枝番を含む）、現烏脇区広場となることから、概ね現広場規模の墳丘が存在していたと思われる。

しかし、地元での聞き取り⑪では、現広場だけでなく、周辺の宅地となっているところも含めて旧道まで墳丘が存在していたとされ、高さも現存する墳丘よりも更に1.7ｍ位高かったということである。また、すも塚古墳付近の区間では旧道と現道（町道板戸・市場線）のルートがほぼ同一であったようである。これらの事から概ね径約30～40ｍ、高さ約3.5ｍの規模を有する円墳ではなかったかと推察される。

また、石室については、規模や詳細な構造は不明であるが、土取作業中に石材が出土しており、出土遺物の年代や須恵器類の形式が複数あることから、横穴式石室を有していたと考えられる。

以上の事から、すも塚古墳は、６世紀後半から７世紀初頭にかけて使用された横穴式石室を有する古墳であるといえる。

では、このいわゆる古墳時代後期において、当古墳の周辺の外観を若干付記してまとめとしたい。

湖北地方においては、中期では伊香郡内に古保利・物部・涌出山古墳群等前方後円墳を含む古墳群が形成され、時をほぼ同じくして茶臼山古墳等、やはり前方後円墳を含む長浜（坂田）古墳群が横山丘陵北端からその西側平野部にかけて成立する。これらの古墳群はともに在地有力首長の拠点的地域を形成していたといえるものである。しかしながら、山東町域では、横山丘陵から派生する支丘頂に烏脇Ａ古墳（上塚）、

中腹の猿田彦女命古墳がわずかに首長系譜⑫がたどれるかどうかという程度で、確固たる前方後円墳を中心とした拠点的地域形成はなされていないようである。

後期に入ると、湖北で唯一前方後円墳を含む息長古墳群（近江町）を除いては、各地に横穴式石室を有する「群」としての古墳が成立する。山東町域においては、すも塚古墳を含む横山丘陵北端からその東側平野部にかけての一群、町内北東端の高岡塚古墳を含む一群、弾正塚古墳群を含む中・西部地域群、王塚古墳を含む南東部の一群がみられるが、等質な小円墳が100基を相前後する、いわゆる群集墳としてではなく、点々と個別的にあるいは小群が分散したように分布する。このことは、中期における在地有力首長層の拠点的地域支配から、集落を構成する在地有力家父長層の支配形成への変遷であり、すも塚古墳においても、追葬の可能な横穴式石室の採用という石室そのものを死後の生活を営む場とする観念に立脚して構築されたものであり、その被葬者も銀象嵌を配した鐔や鉄鏃を媒介とする軍事的な地域掌握の様相を有しているが、集落あるいは山東町北部地域の在地有力家父長層であったのではないかと推察される。

以上で本報告のまとめとするが、浅学ゆえ推論も多く、今後に課題を残すこととなった。先学諸氏の御批判を乞うものである。

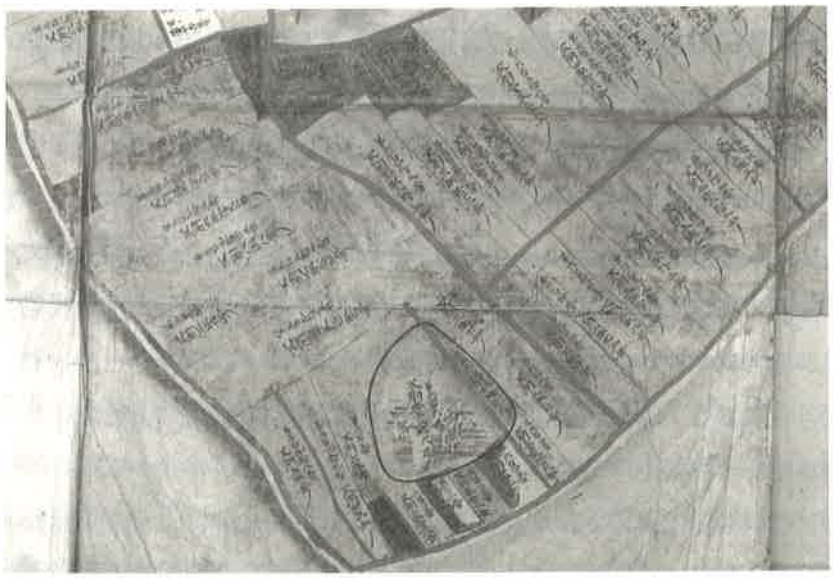


図６　大原村野一色絵図（部分）

附　章　　すも塚古墳出土の銀象嵌鐔について

すも塚古墳の出土遺物は、明治45年、近くの西元寺本堂改築工事の際の土取作業中に発見されたものである。その後、西元寺・烏脇集会所で永らく保管・管理されていたが、出土後約80余年を経過して共伴した須恵器類も破損しており、特に金属製品の錆の進行が著しいことから、滋賀県埋蔵文化財センターに保存処理を依頼した。その保存処理の過程で、鐔の錆の間に僅かであるが銀象嵌の存在が確認されたことから、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室の御協力により、X線写真の撮影を実施したところ、銀象嵌が施されていることが判明した。

象嵌とは、鉄の下地に溝を彫り込み、金・銀・銅の針金を打ち込んで字や模様をつける金工技術であるが、この象嵌の研究については、神林淳雄氏⑬、橋本博文氏⑭、町田章氏⑮、横田義章氏⑯、西山要一氏⑰などの成果があり、また保存科学的な立場からの研究には、樋口清治氏・青木繁夫氏⑱、秋山隆保氏⑲、西山要一氏⑳らのものがある。

全国的にみて、古墳時代の象嵌が施されているものは、刀身の文字象嵌も含めて160例㉑ほどに達していると言われ、地域的には関東地方に多く、次いで畿内・九州に多く分布する。

次に滋賀県内の出土例を見てみたい。県内では、高島町に所在する音羽古墳群石穴支群第14号墳㉒と草津市に所在する北谷古墳群北谷７号墳㉓から共に銀象嵌が出土している。

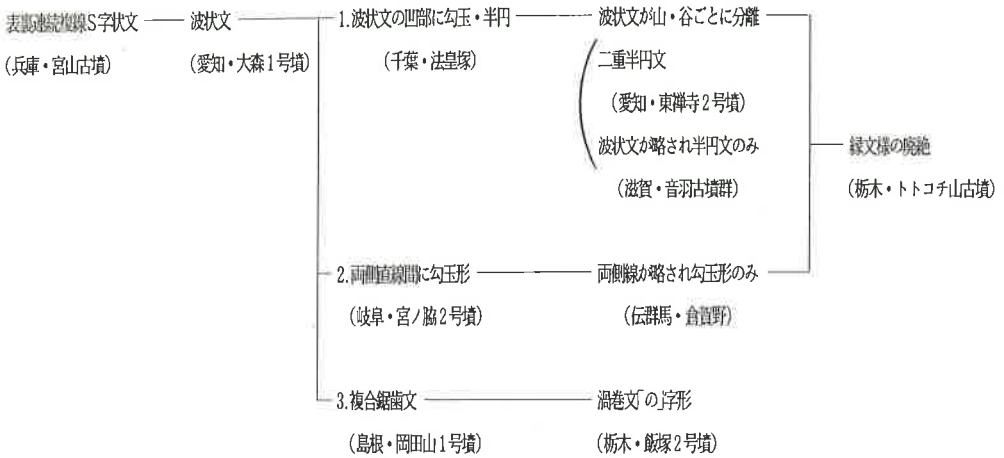
音羽古墳群石穴支群は、昭和57年から59年に渡る変電所建設工事に伴って調査が実施され、第14号墳から出土した直刀の鐔及び巾頸に銀象嵌が施されていた。鐔は長径７㎝短径5.5㎝の倒卵形で厚さ0.4㎝を測る。象嵌文様は鐔両面に左巻に渦巻文が三重にあり、側面には半円文が交互に配されている。また、巾頸にも１単位が約1.2㎝の双渦巻文が施されていると報告されている。

一方北谷古墳群は、昭和35年名神高速道路建設に伴って調査が実施され、その後鉄製品の錆が進行し現状維持が困難な状態となったことから、平成２年度に保存処理を実施され、その過程で発見された。銀象嵌の施されていたのは、北谷７号墳出土の円頭柄頭と金具２点で、円頭柄頭には双竜文が施されており、全国的にも類例がないと

報告されている。

では、今回発見されたすも塚古墳の銀象嵌はどうか。形状等は「出土遺物」に詳しいが、銀象嵌は側面部に直線文と勾玉文が配されていた。

象嵌の編年については、西山要一氏によって文様と形態などの発展過程から詳しく論じられている[24]。それによると、鐔は縁の文様に系統的な変遷がみられるとされ、図示すると次のようになる。

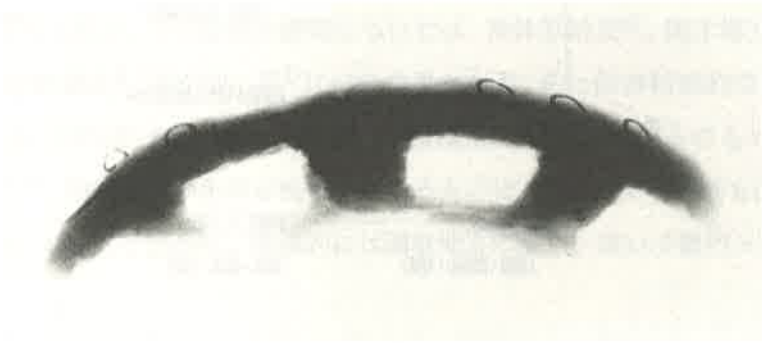


すも塚古墳の銀象嵌鐔をこの編年に求めると、直線文に勾玉形が配された岐阜県宮ノ脇2号墳にその類例を見出すことができる。宮ノ脇2号墳[25]は、昭和49年に発掘調査され、7世紀初頭の横穴式石室を持つ古墳である。銀象嵌遺物としては、鐔・鉸・柄縁があり、その全てに銀象嵌が施されていることが、昭和57年[26]に判明している。このことから、すも塚古墳の鐔も共伴する須恵器類同様6世紀後半から7世紀初頭頃に比定される。

最後に象嵌の意義について若干付言してまとめてしたい。象嵌が施された大刀等を保有する意味合いとして、その一つに権威の象徴をあげることができる。つまり、象嵌大刀等を媒介として地方・地域の経済的・軍事的掌握を目的とするものである。しかしながら、5世紀から7世紀にかけて、時代の変遷と共に銀象嵌大刀等を保有する有力者層が拡大することが出土例から明らかになっている[27]。これらは象嵌大刀等が中央政権下で専門の金工技術集団の手によって製造され、地方・地域の有力者層に分

与されたものと推察される。このことは、文様形態にも如実に反映されており、すも塚古墳の位置した6世紀後半から7世紀初頭頃には、いわゆる在地有力者が象嵌製品を保有するようになる。だが、権威の象徴である象嵌も地方・地域の経済・軍事両面における掌握手段としてその影響力が少しずつ失われていく時期であったのではないだろうか。

しかしながら、今回すも塚古墳から銀象嵌遺物が発見されたことは、山東町北部地域周辺における有力者の存在を裏付けるものであり、当時の社会情勢を考える上でその意義は大きいと言える。



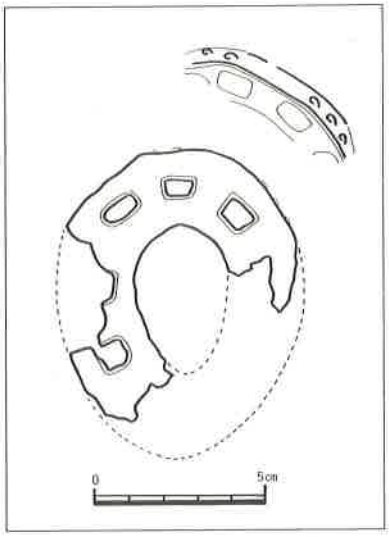


図7　鐔銀象嵌X線写真及び実測図

註

①小江慶雄「滋賀県番の面縄文式住居遺跡」『京都学芸大学学報Ａ－№.９』1956

②山東町史編纂委員会『山東町史』本編　1991

③兼康保明『高岡塚古墳発掘調査報告書』山東町教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会　1985

④林純「近江における古墳時代の須恵器生産の特質」『滋賀考古』第６号滋賀考古学研究会　1991

北村圭弘「西谷窯跡採集の須恵器について」『滋賀文化財だより』№.175　1992

⑤拙稿『菅江遺跡発掘調査報告書』山東町教育委員会　1986

⑥奈良俊哉『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』XII－６滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会　1985

⑦拙稿『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』山東町埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　1986

⑧『陶邑』平安学園考古学クラブ　1966

『陶邑Ⅱ～Ⅴ』㈶大阪文化財センター

⑨小野山節「馬具と乗馬の風習－半島経営の盛衰－」『世界考古学大系』第3巻　1969

坂本美夫『馬具』考古学ライブラリー

⑩註⑨『馬具』

⑪烏脇区の勝居源四郎氏に御教示頂いた

⑫田中勝弘『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』VII滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会　1982

⑬神林淳雄「鉄製大刀と鉄製柄頭」『考古学雑誌』30－３　1940

⑭橋本博文「亀甲繋鳳凰文象嵌円頭大刀について」『常陸梶山古墳』大洋村教育委員会　1981

⑮町田章「鉄に象嵌」『鉄の話題』46　新日本製鉄　1984

⑯横田義章「古墳時代の象嵌文様－九州の諸例紹介を中心に－」『九州歴史資料館研究論集』10　1985

⑰西山要一「大和と象嵌大刀」奈良大学文化講演会『大和の自然と文化』講演資料　1985

⑱樋口清治・青木繁夫「金属製品のクリーニングにおけるエアーブラッシュの応用－鉄錆で隠された銀象嵌の露出処理－」『保存科学』13東京国立文化財研究所　1974

⑲秋山隆保「戊辰銘鉄刀の保存科学的研究」『但馬・箕谷２号墳出土戊辰銘鉄刀』八鹿町・八鹿町教育委員会　1985

⑳西山要一「象嵌銘文の表出」『保存科学研究集会－研究発表要旨集－』奈良国立文化財研究所　1985

㉑西山要一「古墳時代の象嵌－刀装具について－」『考古学雑誌』72－１　1986

㉒白井忠雄他『音羽古墳群Ⅰ～石穴支群調査概要報告～』高島町教育委員会　1984

㉓西田弘『北谷古墳群発掘調査概報』滋賀県教育委員会　1961

〃　「草津市北谷古墳群の調査」、中川正人「北谷７号墳出土銀象嵌柄頭の保存処理」『平成２年度滋賀県埋蔵文化財調査年報』滋賀県教育委員会　1992

㉔註21に同じ

㉕岐阜県教育委員会・可児町教育委員会『宮ノ脇遺跡発掘調査報告書』　1976

可児市郷土資料館『郷土の古墳時代』　1982

㉖長瀬治義氏（可児市教育委員会）に御教示頂いた

㉗註21に同じ

参考文献

- 『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』Ⅰ～Ⅷ滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会
- 宮成良佐他『越前塚遺跡発掘調査報告書』長浜市教育委員会　1988
- 宮崎幹也『塚の越古墳』近江町教育委員会　1991
- 『古墳時代の研究』第８巻　古墳Ⅱ　副葬品　雄山閣出版　1991
- 『　〃　』第10巻　地域の古墳Ⅰ　西日本　雄山閣出版　1990
- 『古墳と国家の成立ち』古代史発掘６　講談社　1975
- 関邦一「銀象嵌表出作業におけるＸ線写真の応用とその成果について」『研究紀要１』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1984
- 『出土遺物・民俗文化財へのＸ線透過試験の応用』元興寺文化財研究所　1981

・『古代研究』元興寺仏教民俗文化財研究所　1974
・『山畑古墳群１』東大阪市教育委員会　1973
・松村冬樹「名古屋市守山区東禅寺２号墳出土の銀象嵌遺物について」『研究紀要』名古屋市博物館　1977
・田中勝弘「横穴式石室の出現と消失」　昭和６１年度第３回滋賀県埋蔵文化財専門職員研修資料　1987

II．坂田郡山東町　大原氏館跡

調　査　経　緯

大原氏館跡（大原判官屋敷跡）は、鎌倉時代以来の有力御家人である佐々木大原氏館跡の居館とされており、現在でもＬ字状の堀や土塁が良好な状態で残存している。

しかし、近年当館跡周辺において、宅地造成・道路建設等が実施され、館跡を取り巻く環境も変化してきたことから、平成３年度に遺跡の範囲確認及びその内容の把握を目的として、遺跡の西南端を調査した。調査の結果、２ケ所設定したトレンチの内北側のトレンチ（Ｔ－２）で、柱穴が検出され、16世紀頃と思われる土師器片が少量出土した。

そこで今回は、前年度の補足調査として、周辺の地形測量を行い、今後の保存活用の基礎資料とするため、１／250の縮尺により測量を実施した。測量面積は約4,500㎡で、金城測量設計㈱に委託した。

大原氏館跡遺跡地形図　S＝1：250

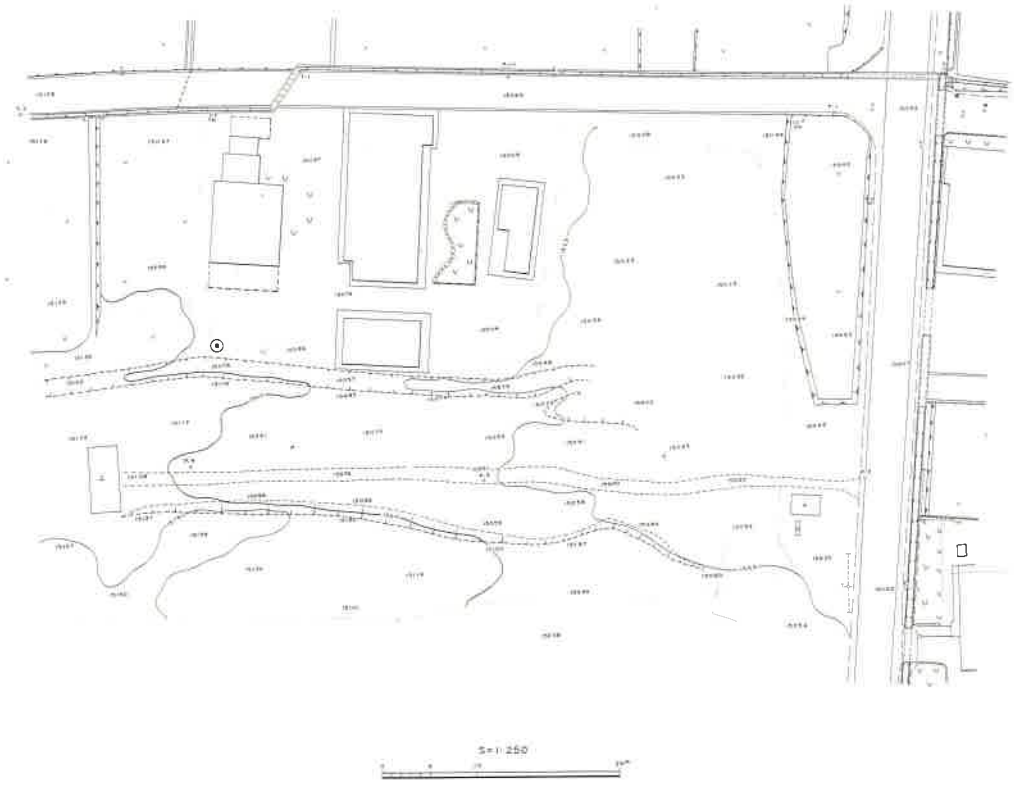
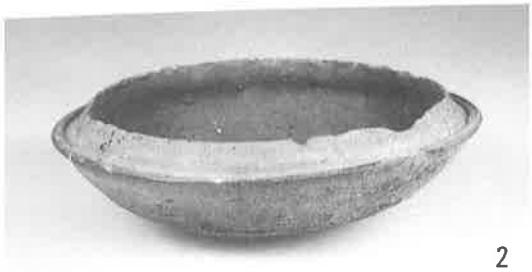


図８　地形測量図

1


2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

出土遺物　須恵器

12

13

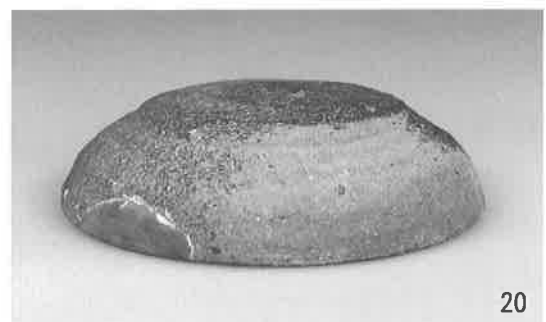
14

18

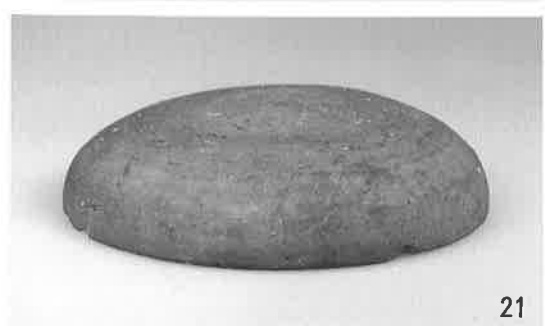
15

19

16


20

17


21

出土遺物　須恵器

22

23

24

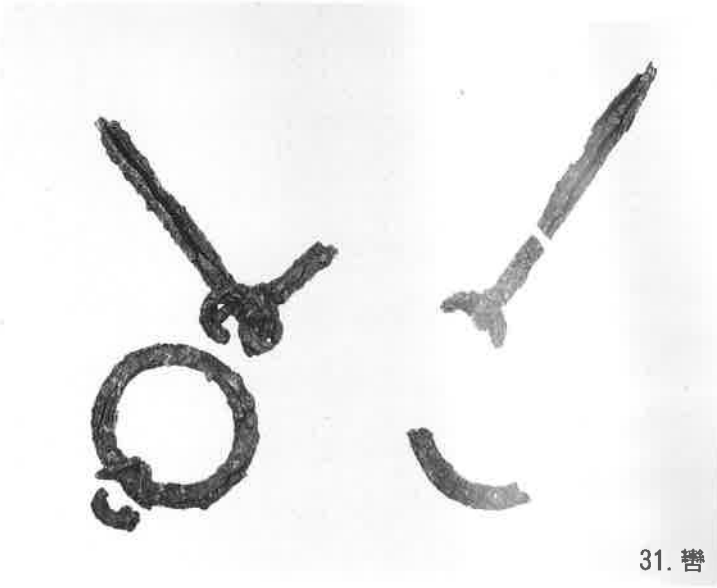
25

26

27

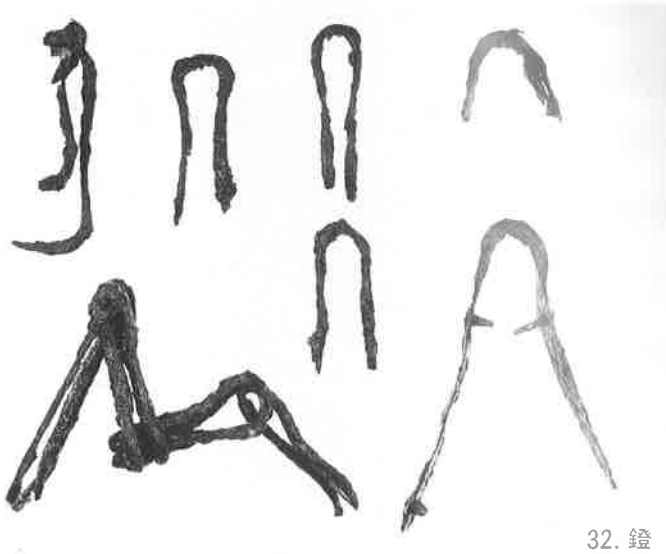
出土遺物　須恵器

出土遺物　須恵器　土師器



31. 轡

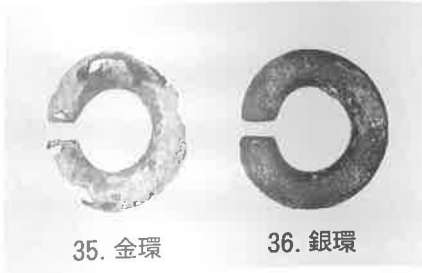
33. 鉄鏃



32. 鐙

37. ガラス小玉

34. 鐔



35. 金環　36. 銀環

出土遺物　馬具　武具　装身具

山東町埋蔵文化財調査報告書　IX

町 内 遺 跡

— 大原氏館跡・すも塚古墳 —
（第２次）

1993年３月

編集・発行　滋賀県坂田郡山東町教育委員会
印　　刷　ニホン美術印刷株式会社